



## 親鸞聖人 非僧非俗の求道者

浄土真宗の絶対他力のみ教え、お念仏とともに人生を歩む生き方を、自ら貫いて生涯を力強く生ききって私たちにお示し下さった、宗祖親鸞聖人お誕生は五月、「降誕会（ごうたんえ）」としてお祝いされます。

\* \* \*

親鸞聖人が生まれられた時代は、宗教的には、仏教を開いたお釈迦さまが入滅されたのちの、教えが衰え、真摯に正しく修行する者も、したがって悟る者もいなくなるという「末法」が訪れるとされた時代であり、政治の世界は、都（京都）の貴族社会を中心とした平安時代から、東国（関東）の武家社会、鎌倉時代へと大きく転換期を迎えるなか、世の中は、戦乱、大規模な天災、それによる飢餓、疫病の流行に、庶民は苦しみ疲弊しきっていた時代でした。

その時代の流れに巻き込まれたご両親と九歳で別れることを余儀なくされた少年親鸞が、比叡山で仏教を学ぶための得度を授かるために訪ねた青蓮院で、すでに夜も遅いから明日にしましょうと氣遣う師、慈円の言葉に、親鸞は、…

**明日ありと思う心のあだ桜  
夜半に嵐の吹かぬものは**

と歌を詠み、明日も美しい桜が見られるとは限りません。夜の間に散ってしまうかもしれないでしょうと、今すぐに得度を受けたいと願われたと伝えられています。幼くして世の不条理といのちの儚さを知った親鸞の感受性と出家への強い決意がうかがえる言葉です。

その日から比叡山へ籠って厳しい修行に励み非常に優秀な修行僧でしたが、当時の仏教、仏教界への疑問、解決の見つからない自らの煩惱に苦悩していたとき、法然上人の専修念仏（お念仏の教え）に出逢われます。

修行した月日を捨て山を下り、上人のもとに通って、ひたすらお聴聞を重ね、私が仏になる道はこの道しかない、「たとえよき人（法然）に騙されて地獄にいこうとも後悔しない」とまで強い信心をいただかれますが、念仏の教えが勢いを増すことを恐れた時の勢力によって、師法然は四国へ、親鸞は越後へと離れ離れに流罪となります。

僧籍も剥奪された親鸞でしたが、流罪先の越後においても、またそこから移り住んだ北関東の地でも、家族を持つての暮らしとともにあったのは、揺るがぬ信心、修行、布教、思索、著作の日々でした。六十歳を前にして家族を残して京へ戻られますが、お寺を建てたり教団を築こうとされるためではなく、息

絶えるその時まで貫かれたのは、僧でもない俗でもない、徹底した念仏者、求道者としての生き方でした。生涯を通して触れ合った土地土地の農民や漁民たちとの暮らしに親しみ、家族生活をすることによって、法然の教えと思想をいっそう深め、完成されていかれたのです。

\* \* \*

浄土真宗のみ教えに生きることとは、この親鸞聖人の生き方を慕い追従するものですが、この生き方こそ修行がないといわれる浄土真宗の肝心であり、難しいところでもあるのです。

念仏者の生き方とは、在家者として家庭生活や社会生活を営みながら「仏に身を任せていく」生き方です。これは一つのこととに専念する修行とは違った大変さがあります。私たちの人生の苦悩が、子育てや仕事、人間関係などの「普通の生活」にこそ生まれるものだからです。このいのちある限り逃れられない苦悩を、お念仏とともにみ教えに立ち返ることによって、そのままありのままに生かされていることに気づかされ「おかげさまで」と転換されていくのです。

**ただ信心を要とすとしるべし  
念仏にまさる善なきゆゑに**

非僧非俗の求道者として生きられた親鸞聖人の迷いなき信心のお言葉です。

合掌

奏庵法座

【降誕会】

日時

5月26日(金)

午前11時～

「真宗宗歌」

正信偈

住職法話

ご文章拝読

「恩徳讃」

～\*～

おとき

慣れ親しんできた季節の変化にもうまく順応できなくなって、ことさらに寒暖の差が身にします。輝く新緑を通して吹く風を「緑のそよ風」とネーミングしたその美しさが満喫できる、一年で一番気持ちのよい季節です。

親鸞聖人のお念仏のお味わいの中にも、暮された土地土地の人々、自然、季節などすべてが生きていることを偲ばせていただく降誕会です。どうぞお参り下さい。



## 親鸞聖人のお言葉

すゑ遠く

法を守らせ居多の神

弥陀と衆生の

あらん限りは

(流罪先の居多ヶ浜上陸に詠む)

善人なほもって

往生をとぐ

いはんや

悪人をや

親鸞は

弟子一人も

もたず候ふ

薬あればとて

毒をこのむべからず

弥陀の本願には

老少、善悪のひとをえらば

れず

ただ信心を

要とすとしるべし

苦悩の旧里はすてがたく

いまだ生まれざる

安養浄土は

こひしからず候ふこと

(歎異抄より)

故法然上人は、

「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひしことを、たしかにうけたまはり候ひしうへに、ものもおぼえぬあさましきひとびとのまゐりたるを御覧じては、「往生必定すべし」とて、笑ませたまひしを、みまゐらせ候ひき

(関東からの疑問に対して  
お応えのお手紙より)

「非僧非俗」について書いていると、自然に思い出されるのが海外開教使をしていた頃の立場だ。着任当初は、貧しくとも代々の寺で生まれ育った者には慣れなかった「雇われ」感だったが、これが本来の僧侶の生き方かもしれないと思うようになった。■給料日になると会計役員が「ハ～イ先生！ペイデイ（支払い日）！」と、一枚のチェッカー（小切手）をひらひらさせながら届けてくれる。それに電話代、保険、ガソリン代などの領収書から公的なものの分を払い戻してくれる。給料は決して高いとはいえず、教会の敷地内にあった住宅もその頃のカナダの標準には及ばない小さな古い家だったが、芝生に囲まれた小市民が住むらしい佇まい。そこに親子3人が暮らし、公用車である中古のステーションワゴンでアメリカ国境からロッキー山麓までの半径500キロ以上の担当地域を宗教家のミッションだけに駆け回る日々だった。■牧師がそうであるように宗教家という普通の社会生活を送る。教会護持は重要な大仕事ではあるが、それはメンバー（信徒）の仕事。先生には英語が上手になっていいお説教を…、という求めのハードルは最後まで楽には飛び越えられなかったが、ゴルフや時にはフィッシングにも付き合い、ともに飲み語って補いながら、まさしく理想の「非僧非俗」の環境だった。■当時の好きだった景色に、草原に残された映画のセットのような傾いた十字架の墓に囲まれた小さな教会があった。ロングドライブの途中そこを通り過ぎるたびに、その教会に老若男女が集っていた時代が浮かび、あそこに眠っている人はここでどんな役割をした人だったのだろうと思い巡らせると、寂しさは感じず、人も建物も自然に還っていくという潔さと穏やかな安らぎの世界を感じたものだった。■お寺は貧しいくらいが「自慢」だったのは、それが楽な生き方だと示すためだったのではないかと思う。宗教家だけにかかわらず、ほとんどの人間はどこかで清貧に生きれたら…と願っている。非僧非俗は万人にも通ずる理想の生き方だと思うが、凡夫にはやはり難しい道なのだ。 Norimaru